

支援の実際

実践化へのヒント

1

『困った子』ではなく、『困っている子』

LD・ADHD等のある児童生徒への支援は、教師が専門的な知識をもつことでより気づきやすくなり、個々の教育的ニーズに応じた支援が可能になってきます。ですから、校内で研修会を開いたり校外の研修会に参加したりすることが重要です。しかし、教師が専門的な知識をもっていない場合も少なくありません。そうかといってあわてることはありません。教師が児童生徒一人一人に寄せる愛情こそが「おやっ？」という教師の気づきを生み、児童生徒が求める教育的ニーズをとらえて支援を開始していく原動力となるのです。LD・ADHD等のある児童生徒は「困った子」ではなく、「困っている子」なのです。

実際の支援でまず担任教師が困るのは、実態を把握し考察する段階でしょう。この段階が不十分だと支援の方向は見えません。自分一人で抱え込まず、校内の同僚に向けて発信し、多くの目で見てもらいましょう。例えば、自律教育担当者、養護教諭、教育相談係、生徒指導主事、学年主任などが相談しやすいかもしれません。

そして、諸検査の実施・専門機関との連携によって専門的な理解を深め、支援の方針を立てていくのです。支援においては、児童生徒の得意な面を見だし、支援に生かしていくことが重要です。そのため、今後専門機関などとの連携が不可欠になると思われます。

本章の事例でもこうした一連の流れや専門的な理解に立った支援が展開されています。



2

『その子』への支援が『すべての子』への支援に

LD・ADHD等があるとすぐに個別支援をイメージしがちです。当然個別支援は必要ですが、通常の学級に在籍する場合、「その子」への支援が実は「すべての子」への支援につながり、結果として学級集団の成長につながるといえるでしょう。

例えば学習支援です。「視覚的教材を使う」「具体的で分かりやすい言葉で説明する」「指示を短く端的にする」「授業の流れをパターン化し、見通しがもてるようにする」などは、LD・ADHD等のある児童生徒のみならず、すべての児童生徒に有効な学習支援となります。また、こうした児童生徒が学級内で活躍できるように工夫していくことは、学級の友だちがその児童生徒のよさに気づき、「友だちにはそれぞれのよさがある」という心情をはぐくむとともに、人への温かい眼差しへと発展

していくことでしょう。LD・ADHD等のある児童生徒は、必ずや学級集団が育つための“ダイヤモンド”（かけがえのない一人）となるはずです。

しかし、行動が学級集団に影響を与えるような場合、通常の学級において担任教師一人で支援していくことは困難です。自律学級などを利用した学校生活づくりを行ったりチームティーチングを行ったりするなど、実際の支援も複数の教師が連携して進められるよう校内支援体制を工夫することが重要です。管理職のリーダーシップが求められるところです。

3

連携のかなめ「自律教育コーディネーター」

チームによる支援の重要性を述べましたが、どちらかという教師は連携があまり得意ではないようです。それは、教師の仕事が自己完結型であったり、仕事が細かく分掌化されていたりするからでしょう。問題を一人で抱え込んでしまい、周りも支援を申し出にくい雰囲気になっている場合も少なくありません。したがって、連携の土台づくりを日常的に進めていく必要があります。教室を開いて、授業を見合ったり指導計画を交換し合ったりすることなどが効果的ようです。そして、支援にかかわる教師・保護者・関係機関をつないで校内支援体制を組織し、牽引していく役割が必要となります。その役割を担うのが「自律教育コーディネーター（以後、コーディネーター）」です。

本章の事例では、すでに様々な立場の教師がコーディネーターの役割を果たしています。例えば、自律教育の担当者、ことばの教室の担当者、担任自身、校長などです。今後は、指名されたコーディネーターがその役割を担っていきます。しかし、対応するケースは教育的ニーズのあるすべての児童生徒に及びますし、コーディネーター一人だけで対応していくのでは負担が大きすぎます。それゆえ、校内委員会がサポートして、柔軟に対応していくことが必要となります。

このように機能させるためには、校内委員会を校務分掌に位置付けていくことが必要です。特に、教育相談機能をもった分掌に設置するのがよいでしょう。

それぞれの学校では、すでにコーディネーターの役割を担っている方もいると思われます。自校の取り組みの成果を全職員で確認し合い、その上に立って新たな学校支援体制づくりを進めたいものです。

